

## テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案

庵 功雄

### 要旨

テイル形、テイタ形の意味はアスペクト研究の中心的なテーマとして詳しく論じられてきた。特に、工藤(1989, 1995)の「パーフェクト」という概念はアスペクトのテキスト的機能までも視野に入れた重要なものである。しかしながら、工藤の「パーフェクト」には本来機能的に異なる「完了」と「効力持続」が混在しており、その結果、かえってその特徴がわかりにくくなっている部分がある。本稿では工藤(1995)に対する有力な批判である岩崎(2000)を参考にしながら、工藤の「パーフェクト」を「完了」と「効力持続」に解体すべきであることを主張した。このように解体することで「-てい-」が反事実の場合にも使われる理由も説明できる。本稿の内容は日本語学習者に対する文法教育(教育文法)という観点からの基礎研究としても意義を持つものである。

**キーワード** 「-てい-」の意味、パーフェクト、継続、完了、反事実

### 0. はじめに

アスペクトは日本語文法研究の中で研究が進んでいる分野である。特に、テイル形、テイタ形の意味については金田一(1950)以来の研究が奥田(1979)で1つの節目を迎え、工藤(1989, 1995)が「パーフェクト」という考え方を提示してそれをさらに進めたと言える。

このパーフェクトという考え方は「完了」という用語の問題点を避け、テイル形、テイタ形の機能を明らかにした点で高く評価できるものである。しかし、最近これに対する有力な反論として岩崎(2000)が現れた。パーフェクトは結果残存のバリエーションに過ぎないとする岩崎(2000)の主張は有力なものであると考えられる。

本稿では岩崎の主張に部分的に賛同する立場から工藤のパーフェクトという概念を再検討する。その過程で、工藤が「パーフェクト」と呼ぶ用法のうち、「完了」と「効力持続・記録」は区別すべきであることを論じる。さらに、岩崎に対する疑問点を提示し、それに対する対案として、工藤の言う「パーフェクト」のうち、「完了」は工藤の言う「先行性」のみを持つものとして捉えるべきであることを示す。そして、そのように捉えることでテイル形・テイタ形が反事実の場合にも使われる理由が説明できることを示す。

### 1. 問題のありか

テイル形、テイタ形の意味については金田一(1950)が「継続動詞、瞬間動詞、状態動詞、第4種の動詞」という分類を立てて以来、盛んに研究が行われ、奥田(1979)でそれが一つの節目を迎えた。

奥田は、テイル形、テイタ形を次のようなパラダイムにあるものとして捉え、テイル形、テイタ形が進行中を表すか結果残存を表すかは動詞が「変化」を持つか否かに依存すると

いうことを指摘した。

(1)

アスペクト テンス	完成相	継続相
非過去	スル	シテイル
過去	シタ	シテイタ

本稿でもこのパラダイムを前提とするが、これを形態論的に考えると次のようになる (cf. 仁田(1997)、庵(2001))。つまり、「シテイル」は「-てい-」、「シタ」は「-φ-」であり、「-てい-」と「-φ-」はアスペクト的に対立し、「-る-」と「-た-」はテンス的に対立するということである。なお、「-φ-」と「-てい-」の対立は *perfective* と *imperfective* の対立であるが、本稿ではこれをそれぞれ「完結相」「未完結相」と呼ぶことにする。

(2) 殴っている：殴っ      -      てい      -      る  
語幹    アスペクト (未完成相)      テンス (非過去)

殴った：殴っ      -      φ      -      た  
語幹    アスペクト (完成相)      テンス (過去)

なお、(2)のように考える場合、テイル形とテイタ形はアスペクト的には共通の意味を持っており、それは形態素「-てい-」によって表されることになる。従って、本稿ではテイル形とテイタ形に共通する意味を考える際にはそれを「-てい-の意味」と呼ぶ。

さて、こうした「基本的テンス・アスペクト体系」(工藤(1995:36))に加えて、工藤(1989, 1995)は「-てい-」の意味として「パーフェクト」を挙げている。「パーフェクト」は工藤(1995:99)によれば「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること」と定義される。例えば、次のようなものがその例である (ともに工藤(1995)より)。

- (3) その本なら、1度読んでるよ。  
 (4) 病院に駆けつけたとき、父は既に30分前に死んでいた。

このパーフェクトの規定に際しては次の3点が重要であるとされる (工藤(1995:99))。

- (5) a. 発話時点、出来事時点とは異なる<設定時点>が常にあること。  
 b. 設定時点にたいして出来事時点が先行することが表されていて、テンス的要素としての<先行性>を含んでいること。

- c. しかし、単なる〈先行性〉ではなく、先行して起こった運動が設定時点との結びつき=関連性を持っているととらえられていること。つまり、運動自体の〈完成性〉とともに、その運動が実現したあとの〈効力〉も複合的に捉えるというアスペクト的要素を持っていること。

このパーフェクトという概念は「完了」という用語の問題点を避け、「ーていー」の意味の重要な側面を明らかにした点で重要なものである。

この工藤の見方に対し、最近岩崎(2000)が反論を試みている。岩崎は「述語論における形態素主義」の立場からテンスに関する興味深い議論を展開している。その中で重要なのは、工藤の言うパーフェクトを表す「ーていー」と「～た」に関するものである。

まず、「ーていー」に関して岩崎は(6)(7)を挙げ、どちらの場合も「開いてい+る」「食べてい+る」であり、ともに「開いてい」「食べてい」で表される「状態」及び「効力」が「る」によって発話時に位置づけられているのであり、両者の間に本質的な差はなく、工藤の言う「パーフェクト」は「結果継続」(本稿の「結果残存」)のバリエーションに過ぎないと主張している。

(6) 窓が開いている。(結果継続。岩崎(2000)の(9))

(7) ごはんはもう食べている。(現在パーフェクト。岩崎(2000)の(10))

一方、「～た」に関しては、工藤のようにこれを「現在パーフェクト」とした場合、「～た」の基準時は「現在」であるが、「～た」が「現在」を表すというのは形態論的に見ておかしい(岩崎の用語で言えば「形態論的に筋が通らない」としている)。

本稿では岩崎(2000)の主張のうち、「ーていー」に関する部分について重点的に検討する。「～た」に関する部分については本稿の最後に私見を述べるに留める。

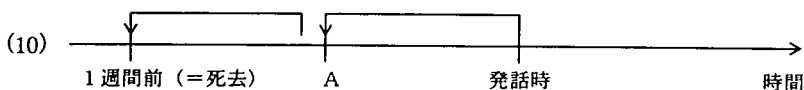
さて、「ーていー」に関して言えば、確かに(7)のような場合には「効力」が残存していると見られる。しかし、次のような場合にはどうであろうか。

(8) (テレビのニュース) 俳優の渥美清さんが1週間前に亡くなっていたことがわかりました。

(ニュースを聞いた妻が夫に) ねえ、渥美清さんが亡くなっていたそうよ。

(9) 昨年、本因坊治勲と小林光一天元が相次いで1000勝を達成したが、大竹英雄九段も昨年5月に到達していたことがわかった。(毎日新聞朝刊1999.2.7)

(8)の場合、テイタ形は次のような時間関係を表すために使われている。

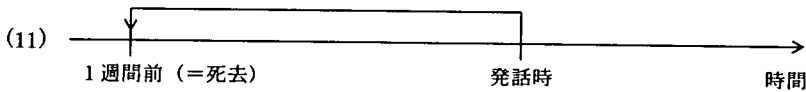


ここで、(8)' と(8)" を比べてみよう。

(8)' 渥美清さん {は/が} 1週間前に亡くなっていたそうよ。

(8)" 渥美清さん {は/が} 1週間前に亡くなったそうよ。

すると、客観的事実としては両者は等価であることがわかる。では、両者はどこが違うのであろうか。ここで、(8)" を図示すると(11)のようになる。



(10)(11)から、(8)' と(8)" との違いは時点Aの存在の有無にあることがわかる。つまり、(8)' では「1週間前」を時点Aに先行する時点として指示しているのに対し、(8)" では「1週間前」を発話時から直接指示しているのである<sup>1</sup>。

さて、この時点Aは1週間前から発話時の間の「渥美さんの死を知ることができたはずの時点」(ex. 通夜や密葬があった時点)である。実際にはこの時点で(親族を除く大多数の日本人は)渥美さんの死を知らなかったのである。(8)' の下線部のテイタ形は工藤(1995)の(過去)パーフェクトに当たるが、この場合、(5)c で言われている「効力」というのが何なのかは疑問であるように思われる。なぜなら、このAの時点(=設定時点)で少なくとも話し手は渥美さんの死を知らなかったのであるから、その時点において何らかの効力が存在するというのは難しいのではないかと思われる。

一方、岩崎(2000)にも問題があるように思われる。もし、岩崎が言うように工藤(1995)の言う「パーフェクト」が結果残存のパリアントにすぎないのなら、(8)"' が文法的であるはずだが、これは事実と反する<sup>2</sup>。

(8)"' ? 渥美清さん {は/が} 1週間前に亡くなっているそうよ。

このように、岩崎(2000)の主張には一部受け入れがたい点がある。本稿では、工藤(1995)のパーフェクトという概念を再検討しそれを一部修正することによって、工藤の主張と岩崎の主張が共存できるものであることを示したいと思う。

1 (8)' における「1週間前」は基準時ではないことに注意されたい。これに対し、(7)aの「私が来たとき」は基準時であり、それに対応して((8)' と(8)" が同じ時間関係を表すのとは違い) (7)a, bが表す時間関係はそれぞれ異なっている。

(7)a. 私が来たとき、田中さんはもう出かけていた。

b. 私が来たとき、田中さんは出かけた。

2 (8)"' は言えるとするれば効力持続としてであろうが、その解釈でも文法性は高くないように思われる。この点については井上(近刊)にも説明がある。

## 2. 「-てい-」の意味

以上の議論を受けて、本稿では工藤(1995)の「パーフェクト」という概念を再検討するわけだが、それは結局、「-てい-」の意味をどのように考えるかに帰着すると思われる。そこで、ここではまず、「-てい-」の用法をリストアップし、それらを統合的に記述するにはどのような意味を設定する必要があるかについて考えることにする。

「-てい-」には次のような用法があると考えられる。

- a. 進行中 (12) 田中さんは部屋で本を読んでいる。
- (13) 外では雨が降っていた。
- b. 結果残存 (14) 窓ガラスが割れている。
- c. 繰り返し (15) 田中さんは毎朝ジョギングをしている。
- (16) 地球上では多くの子どもが栄養不良で死んでいる。
- d. 効力持続 (17) この橋は5年前に壊れている。
- e. 記録 (18) 犯人は3日前にこの店でうどんを食べている。
- f. 完了 (19) 彼からの手紙を受け取ったとき、彼は既に死んでいた。
- g. 反事実 (20) 彼が助けてくれなかったら、私は死んでいた。
- h. 単なる状態 (21) 学校の北側に高い山がそびえている。

このうち、h(金田一(1950)の第四種の動詞に当たる)は形容詞的用法と考え、今回の考察対象からは外す。

本稿ではこれらの用法における「-てい-」の意味・機能を考えるわけだが、結論を先に述べると、「-てい-」の機能はa～eとf, gでは異なる。そして、「-てい-」の意味としては「継続」と「以前」を挙げる必要があると考えられる。

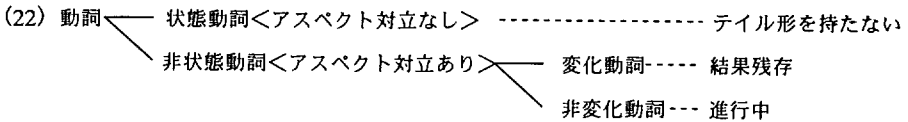
### 2-1. 継続を表す「-てい-」

「-てい-」の中心的な意味は継続である。ここではこの「継続」というプロトタイプの意味がどのように用法を拡張しているかについて考える。

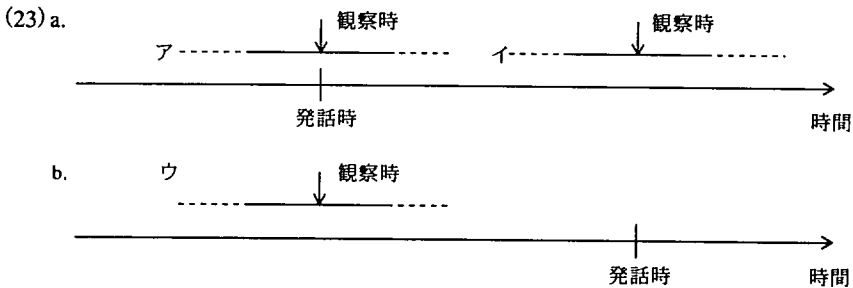
#### 2-1-1. 進行中、結果残存

継続にはaの「進行中」に当たるものと、bの「結果残存」に当たるものがあることと、それぞれの意味がどのような場合に発現するのかという問題が金田一(1950)の「継続動詞」と「瞬間動詞」の区別以来盛んに論じられてきた(cf. 奥田(1979)、工藤(1995)etc.)。単純化して言えば次のようになる。つまり、動詞が非状態動詞で、主体変化を表さない動詞(非変化動詞)であれば「進行中」の意味になり、主体変化を表す動詞(変化動詞)であれば「結果残存」の意味になる。なお、状態動詞と第四種の動詞にはアスペクトの対立が

ない。以上を図示すると次のようになる(図中の「状態動詞」には第四種の動詞を含める)。



このうち、「進行中」というのはある観察時<sup>3</sup>において動作または出来事が続いているということを表す。やや厳密に言えば、観察時以前からその動作または出来事が始まり、観察時以降もそれが一定の間続くということを表す。テイル形とテイタ形の違いは観察時がテイル形の場合は非過去であるのに対し、テイタ形の場合は過去である点にある。図示すると(23)a, bのようになる。ここで、アは現在の進行中、イは未来の進行中、ウは過去の進行中である。



一方、「結果残存」は観察時以前に起こった出来事の結果が観察時にも存在していることを表す。この場合の「結果」は「(主体の) 変化の結果」である。従って、その変化が起こった時点(仮に「変化点」と呼ぶ)の前後で主体の状態が $\sim P$  ( $P$ ではない) から  $P$  に変化する<sup>4</sup>。(24)a, bを図示すると各々(25)a, bのようになる。この場合、 $P$ は「(窓ガラスが) 割れた状態」である。なお、テイタ形の場合、 $P$ という属性は観察時には存在す

3 本稿では動作・出来事・状態が観察される時点を観察時と呼ぶことにする。観察時は完了の場合の基準時とは異なる概念である。

4 「変化」は「死ぬ」のように瞬時的な場合もあるが、多くの場合は一定の時間を必要とする。従って、「-てい-」が変化の進展中の局面を捉えることも可能であり、その場合は進行中になる。例えば、(イ)の優先される読みは結果残存だが、氷の溶解を観察しながらの発話であれば進行中の解釈も可能となる。この場合は「溶ける」という動詞の「変化(後)」の局面ではなく、変化の進展(の最中)の局面が捉えられており、その意味で他の非変化動詞と異なるところはない。

(イ) 池の水が溶けている。

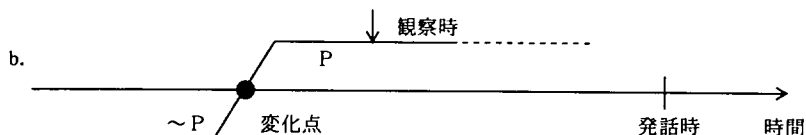
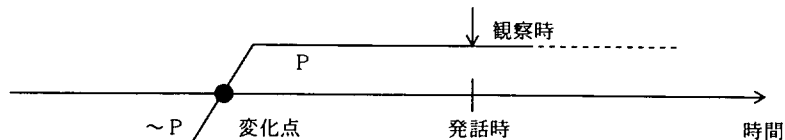
この場合、変化の進展の明示化のために「~つつある」が多く使われる(庵他(2000))。

るが発話時には存在しない。発話時にもPが存在する場合はテイル形が使われる<sup>5</sup>。

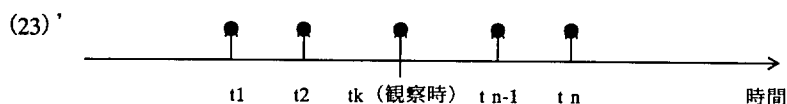
(24) a. 窓ガラスが割れている。(現在における結果残存)

b. 窓ガラスが割れていた。(過去における結果残存)

(25) a.



(23)は「-てい-」が使われる最も典型的な場合を表している。この場合、観察時を含む一定の期間内のどの時点においても動きが観察される。ここで実際には時点 $t_k$ と $t_{k+1}$ の時間差は無限小であるから、結局この点の連続が(23)のような実線を作ることになる。



「継続」というのはこのようにして捉えられた「線」のことであり、時間軸の中に「線」が認識できれば「-てい-」を使うことができる<sup>6</sup>。

(23)は進行中の場合であるが、同じことは(25)のような結果残存の場合にも言える。この場合は変化点以後に存在する状態が線的にとらえられているのである。

さて、(25)のような結果残存の場合、事態は「変化(出来事)+結果(状態)」という構造を持っているが、日本語ではこのように結果の状態が観察時に存在する場合には結果の側面に注目することが義務的である<sup>7</sup>。例えば、台所に入って皿が割れた状態にあるのを発見した場合には(26)bは使えず、(26)aが使われる。(26)bが使えるのは変化を実際に目撃した場合に限られる(その場合「~た」は完了を表す)。

(26) a. あっ、皿が割れている。

5 次のような場合には発話時までの継続にテイタ形が使うことが可能である。

(f) この時計は昨日から{壊れていた/壊れている}よ。

この現象は三上(1953=1972:222)が指摘する次のような現象と類似のものと見られる。

(g) この椅子は先刻からここに{あった/ある}。

6 このように「継続」を点の連続として見る見方は寺村(1984:130, 131)による。なお、寺村はこれを習慣、反復の場合のこととして述べているが、この見方は全ての「継続」に当てはまると思われる。

7 これに対し、中国語ではこうした場合通常は変化の側面が注目される(cf.張(2001))。

b. #あつ、皿が割れた。

### 2-1-2. 繰り返し

「-てい-」が使われるもう一つの場合は繰り返しである。繰り返しには、(15)のように同一主体による動作・出来事が複数回存在する場合と、(16)のように複数の主体による動作・出来事が存在する場合がある。

(15) 田中さんは毎朝ジョギングをしている。

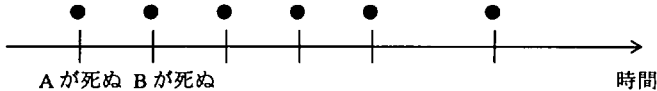
(16) 地球上では多くの子どもが栄養不良で死んでいる。

しかし、寺村(1984)が指摘しているようにどちらの場合にも個々の動作・出来事の「点」が集まって「線」になるという点は共通しており、両者を区別する必要は特にはない。

(15) 田中さんは毎朝ジョギングをしている。



(16) 地球上では多くの子どもが栄養不良で死んでいる。



以上見た3つの用法に関しては通常、「進行中」と「結果残存」が基本的で、「繰り返し」は派生的とされている。確かに、「-てい-」が「進行中」と解釈されるか「結果残存」と解釈されるかは動詞の語彙的意味に依存するのに対し、「繰り返し」は「(ジョギングを)する」のような非変化動詞でも「死ぬ」のような変化動詞でも可能であるという意味でそうした指摘は正しいが、「-てい-」の意味の拡張という点からすればこれらは全て基本的と考えられる。つまり、ここには具体的な点の連続が想定できるのである。

### 2-1-3. 効力持続、記録

次に「-てい-」の意味として真に派生的なものについて考える。

まず、最初は効力持続である<sup>8</sup>。効力持続というのは過去に起こった動作・出来事の結果生じた効力が観察時(多くの場合は発話時<sup>9</sup>)にも存在する場合である。(27)-(29)が

8 効力持続の記述に関しては広島大学の白川博之氏の御教示によるところが大きい。なお、この用法については井上(近刊)も参照されたい。

9 なお、この用法はテイル形で発話時における効力の持続を表すために使われることが多いが、次のように発話時以外の時点における効力の持続を表すためにも使える。

(例) 亡くなった父は若いころたくさん遊んでいた。(だから、若い者の行動に理解があった。)



これに当たるが、例えば、(27)は(27)'のような文連続の中で使われるのが普通である。

(27) 父は若いころたくさん遊んでいる。

(28) この橋は5年前に壊れている。

(29) 彼はこれと似た問題を以前解いている。

(27)' 父は若いころたくさん遊んでいる。だから、若い者の行動に理解がある。

つまり、(27)で言えば、「若いころたくさん遊んだ」という事実の効力として「若い者の行動に理解がある」という現在観察される事実／属性が存在するということである<sup>10</sup>。

このように、(27)は(27)'のような文脈で使われるのであるが、これは次のように解釈できる。つまり、(27)は意味的に(27)''という構造を持っているということである。

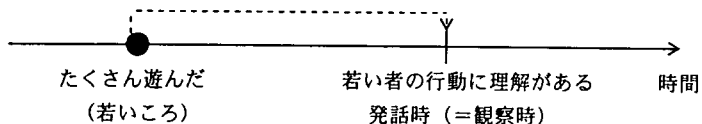
(27)'' 父は若いころたくさん遊んだ+若い者の行動に理解がある

観察時以前の事実

観察時における属性

これを図示すると次のようになる。

(27)' 父は若いころたくさん遊んでいる。



効力持続が(27)''のように異なる時点における2つの事態を包含して表しているとすれば、「-てい-」はその2つの事態を結びつける働きをしていると考えられる。実際、これらの場合においてテイル形をタ形に代えると文連続の許容度が落ちる。

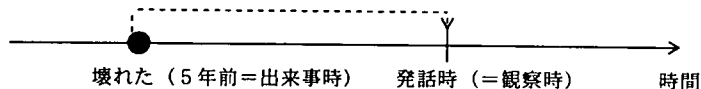
(27)''' ? 父は若いころたくさん遊んだ。だから、若い者の行動に理解がある。

岩崎(2000)の指摘のように効力持続は結果残存と類似性を持つ。次例を比較してみよう。

(30) この橋は5年前に壊れている。(効力持続)

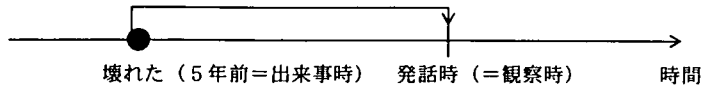
(31) この橋は5年前から壊れている。(結果残存)

(30)' この橋は5年前に壊れている。



10 「若い者の行動に理解がある」というのは想定される属性の1例である。

(31)' この橋は5年前から壊れている。



図から明らかなように、効力持続と結果残存には共通点と相違点がある。共通点は出来事時と観察時が結びつけられている（両者の間が「継続」している）という点である。一方、相違点は結果残存では具体的な「結果」が存在するのに対し、効力持続ではそうしたものは存在しないという点である（このことが(30)(31)における「に」と「から」の違いに反映している）。図ではこの点を実線と破線で表している。

このように、効力持続は結果残存と類似性があるわけだが、いずれにしても「ーていー」の意味としては派生的なものと思われる。それはこの場合の「継続」が(30)の破線で表されているように抽象的なものであるためである。

次に考えるのは「記録」である。記録というのは、観察時以前の出来事を何らかの証拠に基づいて述べたり、主語の経歴として述べたりする際に用いられる用法である<sup>11</sup>。

(32) 犯人は3日前この店でうどんを食べている。

(33) 華麗に見える細川〔護熙〕さんだが、その権力論は外見とは違って、新政権の支えに回る小沢一郎さんに通じるものがある。

一昨年夏のテレビ講話をまとめた『権不十年』の著書によると、こんなことを述べている。

「政治改革の目標は、あえて反論を覚悟でいえば（略）『政治権力の強化・集中』ということしかないのではないか」。(天声人語 1993.8.7)

(34) 夏目漱石は若いころイギリスに留学している。

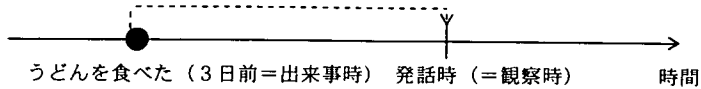
この用法の特徴は何らかの証拠（記録）に基づいて述べるという点にある。例えば、(32)は事件の聞き込みに戻っている刑事が聞き込みで得た情報を基に述べている場面などにふさわしい。証拠の存在は(33)の「～によると」のように明示的に表される場合もある。また、この用法は(34)のような歴史的事実を述べる際に用いられることが多いが、これは歴史が証拠を基に語るという性質を持つためであろう。

11 記録はテイル形をとることが多いが、次のようにテイタ形になることもある。この場合は記録（ここでは藤島氏の著作）を読んだのが発話時以前であるということからテイタ形が使われている。なお、この場合著作は現存するのでテイル形を使うこともできる。

(カ) コンビニ食文化について、サッカー日本代表のトルシエ監督の言が面白い。スポーツライターの藤島大さんが書いていた。コンビニが日本のサッカーを弱くしている、いつでもどこでも食べられるという安心感から食事への緊張感がない、試合への集中力も衰える、そんな趣旨だった。(天声人語 2001.4.14)

ここで(32)を図示すると次のようになる。

(32) 犯人は3日前にこの店でうどんを食べている。



図では記録と効力持続の間に差はないが、両者の間には違いもある。

第一の違いは、効力持続の場合は上述のように述部が主語に対して有意な属性付けになっていなければならないのに対し、記録は証拠に基づいて述べているだけであるためそうした制約はないということである。

違いの第二は証拠の存在にかかわるものである。つまり、記録は証拠に基づくため、証拠が現存する場合（典型的には(33)のように「～によると」などの形で明示される場合）は観察時を中心に述べるのが義務的になり、（観察時が発話時である場合は）タ形との間にニュアンスの違いが存在すると言う以前にタ形が使いにくくなるのである。

(33)' 『権不十年』の著書によると、[細川氏は] こんなことを述べた。

これは(26)のような発見にかかわる結果残存の場合にタ形が使えないのと平行的な現象である。上述のように、(26)のような場合は変化の結果の状態が具体的に（知覚可能な形で）存在するため、「-てい-」を使わなければならない。

(26)a. あっ、皿が割れている。 （結果持続）

b. #あっ、皿が割れた。

これに対し、効力持続の場合は観察時における効力の有無というニュアンスの差を除けばタ形自体は使うことができる。

(30)a. この橋は5年前に壊れている。(効力持続)

b. この橋は5年前に壊れた。 （単なる過去）

以上「-てい-」が「継続」を表す場合を見てきた。まとめると、「-てい-」の最も典型的な用法は動きが具体的に存在する「進行中」の場合である。「結果残存」は継続しているのが動きを伴わない状態である点で「-てい-」の典型からはやや外れるが、継続しているものが具体的（知覚可能）である点で進行中の意味の自然な拡張と捉えられる。一方、「繰り返し」は進行中や結果残存のような連続した動きや状態ではないが、具体的な動きが複数回（複数の主体による同一の動きの場合もある）行われている点で、自然な形で継続として捉えられる。これに対し、「効力持続」と「記録」は継続するものが抽象的である点で上記の3用法よりも継続の典型から外れるが、出来事時と観察時が結びつけ

られており、そこに継続を読み取ることができる。

## 2-2. 以前を表す「-てい-」

2-1では「-てい-」の意味として「継続」を挙げ、その典型的な用法から周辺の用法への連続性を見た。しかし、「-てい-」の意味としては継続だけでは不十分であり、もう一つ「以前」を挙げる必要があると思われる。ここでは、「以前」の例として「完了」と「反事実」について考える。

### 2-2-1. 完了

「完了」というのは基準時以前に動作や出来事が完結しているという意味である。完了は基準時の違いに応じて、「現在完了」「未来完了」「過去完了」がある。このうち、未来完了が「~ている(だろう)」、過去完了が「~ていた」で表されることには問題はない。それぞれの例は次のようなものである((35)(36)は未来完了、(37)(38)は過去完了)。

(35) 今出発したら、9時には東京に着いているだろう。

(36) 私が留学から帰るまえに、この駅の工事は終わっているだろう。

(37) 彼は締切までに論文を提出していた。

(38) 私が帰ったとき、彼は既に出かけていた。

一方、現在完了には問題がある。それはタ形の意味として完了を認めるか否かということである。これに関しては否定形との関係から「~た」には「過去」と「完了」の2つの意味があるとした寺村(1971=1984)の説が有力である(なお、寺村の挙げるタ形の第三の用法である「ムードのタ」については別稿で考えたい)。

(39) A: 昼ごはんを食べましたか。

B: いいえ、食べませんでした。

(40) A: 昼ごはんを食べましたか。

B: いいえ、まだ食べていません。

寺村は(39)(40)の否定形はそれぞれ「過去」と「完了」であることから、それに対応する肯定形も「過去」と「完了」であるという議論をしている。

寺村の説は日本語教育の立場から見ても妥当なものと思われる。しかし、本稿で前提としているような文法カテゴリー論を採り、一方で「~た」がアスペクトを表しているとすると、(40)Aにはテンスがないことになるという批判が鈴木(1979)などで行われた。

これに対し、工藤(1995)はアスペクトの中に完成相、継続相に加えてパーフェクト相を設け、タ形を「現在パーフェクト」とすることでこの問題を解決しようとしている。つまり、タ形は現在を設定時とするパーフェクトを表すということである。

しかし、この分析を採っても形態論的な矛盾は解決されない。これが岩崎(2000)の批判である。この点についての岩崎の議論は説得的であり、「完了の「～た」」を保持することに問題があるのは事実である<sup>12</sup>。しかし、論者は「完了の「～た」」は保持するべきではないかと考える。それは、次の(41)～(43)のようなタ形を「過去」と呼ぶことに((40)Aを「現在」パーフェクト」と呼ぶのと同じような)違和感を感じるためである。

(41) (宿題が終わったとき) できた。

(42) (丸太を切っていて2つに切っていてそれが成功した瞬間) 切れた。

(43) (買い物を終えた客に対して店員が) ありがとうございます。

これらの場合、対象となる動作・出来事が日常的な意味で「過去」と言えるのかは疑問であろう。もしそうした日常的な用語法とのずれを無視して「過去」という概念を使うことが許されるのなら、工藤(1995)のようにタ形を「「現在」パーフェクト」と呼ぶことも許されてよいのではないだろうか。実際、Sapir(1921)や Benveniste(1966)などが指摘しているように、ドイツ語やフランス語では「現在」完了形が話しことばでは「過去」を表す形として使われており、「過去」と「現在完了」が融合することは珍しいことではない。

以上のような理由から本稿ではタ形を現在完了を表す形式として認める。一方、テイル形は少なくとも典型的な現在完了の形式ではない。それはテイル形には疑問文になりにくいというタ形にはない制約があるためである。例えば、特定の文脈なしに(44)を使うことはできないように思われる。

(44) ?もう昼ごはんを {食べていますか/食べているのですか}。

これに対し、(45)～(47)は自然であり、意味的にも「基準時以前に動作・出来事が終わっているか否か」を尋ねることはできるはずであると考えられることからテイル形は少なくとも現在完了を表す典型的な形式とは言えないように思われる<sup>13</sup>。

(45) もう昼ごはんを食べましたか。

(46) パンは昼までに焼けていますか。

(47) あなたが帰ったとき、彼は既に出かけていましたか。

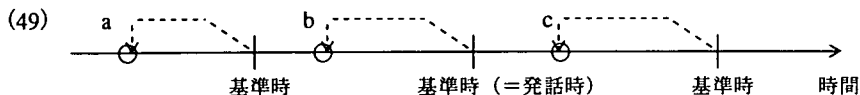
12 工藤(1995)の「現在パーフェクト」の「～た」という見方に対する批判としては井上(近刊)も参照されたい。

13 ただし、「～始めている、～終わっている」のように動作・出来事の局面を明示的に表しているものは現在完了と見るべきであろう。

なお、(48)は自然だが、この場合は完了というよりも効力持続の意味であろう<sup>14</sup>。

(48) 宿題はもうできていますか。

まとめると次のようになる。(49) a が過去完了、b が現在完了、c が未来完了である。



(50)

未来完了	~ている (だろう)
現在完了	~た / (~ている)
過去完了	~ていた

ここで、「~ていた」「~ている」における「-た」と「-る」が基準時を表しているという点については問題はないと思われる。問題は「-てい-」だが、この場合の「-てい-」は「継続」を表してはいないのではなかろうか。むしろ、この場合の「-てい-」は「以前」を表すとした方が(51)のテイタ形の意味を考える際には有効であろう<sup>15</sup>。

(51) 昨年、本因坊治勲と小林光一天元が相次いで1000勝を達成したが、大竹英雄九段も昨年5月に到達していたことがわかった。(= (9))

「-てい-」の意味として「継続」の他に「以前」を立てるとするのは、言い換えれば「完了」と「効力持続」を区別するということでもある。両者を区別する理由は「-てい-」の機能が異なることにある。つまり、「効力持続」の場合、「-てい-」は観察時以前の動作・出来事の効力が観察時において認められることに焦点があるのに対し、「完了」の場合は動作・出来事が基準時以前であることに焦点があるのである。言い換えれば、動作・出来事の位置づけの方向性(図では矢印で表している)が2つの用法では正反対であるということである(この点については(30)'と(49)を比較されたい)。

## 2-2-2. 反事実

「-てい-」の意味として「以前」を立てることの効果は反事実用法を視野に入れると

14 この意味の「~ている」は益岡(2000)の言う「パーフェクト相を表すシテアル」に相当すると思われる。ちなみに、益岡は「パーフェクト相を「効力の現存」という概念で規定するとすれば、シテアル(シテアック)のほうがその内容によりふさわしい」(益岡(2000:107))と述べている。

15 英語の過去完了の意味に大過去(past in the past)がある(Quirk et al.(1985:195-197))が、(51)の意味はまさにこれに相当する。

よりはっきりする。

反事実用法とは次のように、事実とは反対の内容を述べる場合である（(52) (53)は過去における反事実、(54)は現在における反事実）。

(52) 彼が助けていなかったら、彼女は〔死んでいた／??死んだ〕。

(53) もう少し勉強していれば、試験に〔合格していた／?合格した〕。

(54) 今お金があったら、あのカメラを〔買っている／(?)買う〕よ。

田窪(1993)などが指摘するように、こうした反事実用法では「-てい-」が使われる<sup>16</sup>。「-てい-」が「以前」を表すということを踏まえるとこの現象は次のように考えられる。

まず重要なことは反事実用法は現実の内容を述べているのではないということである。言い換えると、(52)～(54)のような文はそれ以外の文とは法(mood)<sup>17</sup>が異なるのである。英語では法は法助動詞(modal auxiliary)で表される(Quirk et al.(1985:1010ff.))が、日本語にはそれに当たるものが基本的に存在しない。ここで、英語の過去の仮定法について考えてみよう。

(55) If they had invited him to the conference, he would have attended.

(Quirk et al.(1985:1010))

すると、仮定法を表す主節では法助動詞 would が使われているだけでなく、通常の(即ち、直説法の)過去形より1つ前の時制を表す完了形が使われていることが分かる。このことは、(52)～(54)の日本語の文で「以前」を表す「-てい-」が使われていると対応している。つまり、日本語の場合も、通常の過去より1つ前の時点を表す過去完了形を使うことによって、それが直説法ではなく、仮定法の文であることが示されていると考えることができるのである<sup>18</sup>。ただし、日本語の場合には法助動詞が存在しないため、「-てい-」が(反事実を表す)完了形を表すと解釈されるとは限らない。実際、(52)'は結果残存と解釈されるのが普通であり、(56)は過去の進行中と解釈されるのが普通である。

16 ただし、「だろう」などのモダリティ形式をつけたり、「のに」で言いさしたりする場合は「-てい-」がなくても文法的になる(cf. 田窪(1993))。

(52)' 彼が助けていなかったら、彼女は死んだだろう。

(54)' 今お金があれば、あのカメラを買うのに。

17 「ムード」は「モダリティ」と同義語として使われることが多いが、ここではこの語を西洋語における mood (法) の意味で用いる。なお、仁田(1991)は「法」に当たる概念を「モード」と呼んでいる。

18 この見方は工藤(1997:63)の見方に非常に近いものと考えられる。工藤(1997:63)も反事実を表すテイル形/テイタ形には「パーフェクト性を特徴づける<結果・効力の現存性>はなく、ひとえに、スル(シタ)形式と同じ<完成性>だけを表している」としている。本稿と工藤(1997)との違いは「反事実」だけではなく「完了」の場合においても<結果・効力の現存性>はないと考える点にある。

(52) 彼女は死んでいた。

(56) 彼女は飛行機に乗っていた。

以上のことから、日本語の場合はあくまで、前件によって反事実性が保証された場合に限り、「-てい-」が反事実を表せるにすぎないことが分かる。しかし、そうした制約はあるとしても、「-てい-」が反事実を表せるのは「-てい-」が「以前」という意味を持っているからに他ならない。その意味で、「-てい-」の意味として「以前」を立てることには意味があると考えられる。

### 3. パーフェクトについて

以上、「-てい-」の意味について詳しく見てきた。その結果、「-てい-」の意味としては「継続」と「以前」を認める必要があることが分かった。ここでは、このことを基に工藤(1989, 1995)の「パーフェクト」という概念について考えてみたい。

前述のように、工藤はそれまで「完了」や「経験・記録」と呼ばれていた「~た」や「-てい-」の意味を「パーフェクト」として取り出している。このことの意義は特にそのテキスト的機能の指摘という点において研究史上、極めて重要なものであると言える。

しかし、「完了」と「経験・記録」(本稿の用語では「効力持続」と「記録」)を「パーフェクト」という語の下に統合したことには弊害もある。つまり、2-2-1で見たように、統合の結果、「完了」と「効力持続」「記録」という本来関連づけの方向性が正反対であるものが同じ性質であるように見られるようになってしまったのである。

工藤(1995)に対する岩崎(2000)の批判のうち「-てい-」に関する部分、即ち、パーフェクトは結局結果残存のバリエーションにすぎないという部分は、工藤が(5)cをパーフェクトの規定の中に取り込んだことから必然的に生じるものであると思われる。

- (5)a. 発話時点、出来事時点とは異なる<設定時点>が常にあること。
- b. 設定時点にたいして出来事時点が先行することが表されていて、テンス的要素としての<先行性>を含んでいること。
- c. しかし、単なる<先行性>ではなく、先行して起こった運動が設定時点との結びつき=関連性を持っているととらえられていること。つまり、運動自体の<完成性>とともに、その運動が実現したあとの<効力>も複合的に捉えるというアスペクト的要素を持っていること。

以上の議論を受けて、本稿では次の提案を行いたいと思う。

- (57)a. 工藤(1995)の言う「パーフェクト」の中から「完了」を除く。
- b. 本稿で言う「効力持続」と「記録」を改めて工藤の言う「パーフェクト」と



して捉える。

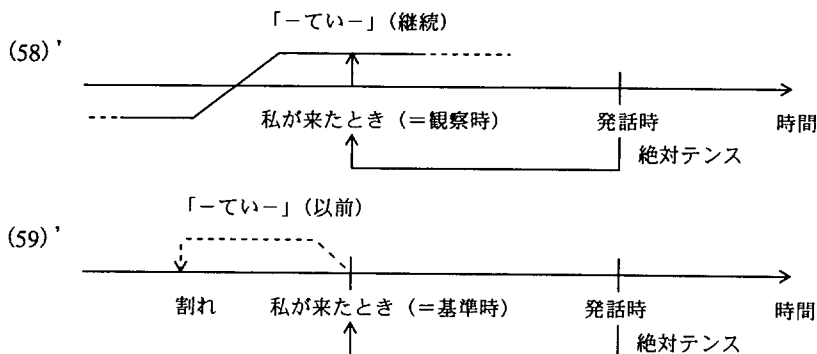
2-1で見たように、「効力持続」と「記録」は「継続」として「進行中」「結果残存」「繰り返し」と共通のものと捉えられるのに対し、「完了」はそのようには捉えられない。(57)はこうした本稿の捉え方を改めて述べたものである。

さて、工藤(1995)に対する岩崎(2000)の批判は「形態論的に筋が通らない」ということにあった。岩崎の批判のうち、「～た」に関する部分については「形態論的に筋を通す」ことは不可能であるように思われる(ただし、(41)～(43)について述べたことから分かるように、「形態論的に筋が通る」こととそれが「過去」として「心的実在性がある」ということは必ずしも全同ではない)。しかし、「～ていー」に関する部分については(57)に掲げた見方は形態論的にも筋が通るのではないかと思われる。

(58) 私が来たとき、窓は割れていた。(過去の結果残存)

(59) 私が来たとき、窓はもう割れていた。(過去完了)

例えば、(58)(59)の「割れていた」はともに「割れ～ていーた」と分析されるが、(58)では「～ていー」が(結果の)継続を表し、「～た」は観察時を表すのに対し、(59)では「～た」が基準時を表し、「～ていー」がそれ以前を表す。図示すると次のようになる。



このように、(57)のように「～ていー」に「継続」と「以前」という2つの意味を認めると、文中の時を表す成分が、継続の場合は観察時を表すのに対し、以前の場合は基準時を表すということもはっきりする。これに対し、工藤(1995)のように「完了」を「パーフェクト」の中に入れてしまうと、「完了」の場合にも「効力」を言わなければならないとなり、岩崎(2000)が指摘するような批判を受ける余地を残すことになってしまう。

以上のことを基に、本稿と工藤(1995)の違いをまとめると次のようになる。

(60) 「-てい-」の用法とアスペクト

	工藤(1995, 1997) <sup>19</sup>	本稿	
進行中	継続相	(狭義) 継続相	(広義) 継続相
結果残存			
繰り返す	反復相		
効力持続	パーフェクト相	パーフェクト相	
記録			
完了		完了相	
反事実			

なお、工藤(1995)の「パーフェクト」は「先行性」(本稿の「以前性」と「効力持続」をともに含んでいるが、これまでの議論でこの規定には問題があることが明らかになったと思われる。本稿の「パーフェクト」は工藤のそれと同じく「以前性」と「効力持続」を含むが、本稿の「完了」は「以前性」を持つものの「効力持続」という素性は持たない。このような「パーフェクト」の規定は注 14 に挙げた益岡(2000)の見方とも通じるものがあると思われる。

4. まとめと今後の課題

本稿では「-てい-」の意味の捉え方について考えた。これについては工藤(1995)の「パーフェクト」という概念が重要であるが、ここではそれに対する有力な批判である岩崎(2000)を参考にしつつ、「パーフェクト」という概念について改めて考えた。その結果、「パーフェクト」は「完了」と「効力持続」に解体すべきであるという結論に至った。そうすることによって、「効力持続」を継続相との関連で位置づけ、「完了」を以前性という観点で位置づけることが可能になる。さらに、「-てい-」に「以前性」という意味を認めることによって、反事実の場合に「-てい-」が使われる理由も説明できる。

「-てい-」には(60)に示したような多様な用法がある。日本語教育という観点から言

19 反事実の部分は工藤(1997)によって補った。

例えば、(60)の諸用法のうち、進行中、結果残存、繰り返しは初級で導入される<sup>20</sup>が、効力持続以下の用法が中級以降体系的に導入されることは少ないように思われる。これには「中上級には文法はない」という先入観による部分も大きい、「ーていー」の意味の把握が十分に行われていないということも影響しているのではなからうか。本稿ではそうした点も考慮し、学習者への提示ということも踏まえた上で、「ーていー」の意味としてより妥当なものを考えることに留意した。

残された問題として重要なのは反事実用法である。2-2-2で見たように、反事実用法は「ーていー」によって表されるが、「べきだった、はずだった、のだった」のようなモダリティ形式のタ形によっても表される。

(61) 彼はパーティーに来る {べきだった/はずだった}。

(62) A: 昨日のパーティーどうだった?

B: 面白かったよ。来ればよかったのに。

A: そうか。行くんだったなあ。

「ーていー」とこうしたモダリティ形式のタ形の間には機能的類似性があるように思われるが、これについては別稿で考えたい。

#### 参考文献

- 庵 功雄(2001)『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク  
 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク  
 -----(近刊)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク  
 井上 優(近刊)「現代日本語の「タ」」「た」の言語学」ひつじ書房  
 岩崎 卓(2000)「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『日本語学』19-5  
 奥田靖雄(1979)「アスペクトの研究をめぐって-金田一段階-」奥田靖雄(1985)『言語の研究』むぎ書房に再録  
 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」金田一春彦編(1976)『日本語のアスペクト』むぎ書房に再録  
 工藤真由美(1989)「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学』3, むぎ書房  
 -----(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房  
 -----(1997)「反事実性の表現をめぐって」『横浜国立大学人文紀要第二類語学・文学』44, 横浜国立大学  
 田窪行則(1993)「談話管理理論から見た日本語の反事実条件文」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版  
 張 麟声(2001)『日本語教育のための誤用研究-中国語母語話者の母語干渉20例-』スリーエーネットワーク

20 ただし、学習者にとって結果残存用法の習得は容易ではない。例えば、次のようなテイル形は学習者には使いにくく、タ形で代用することが多い (cf. 張(2001))。

(4) (知人の庭の花が満開であるのを見て) 花がきれいに咲いていますね。

- 寺村秀夫(1971)「‘夕’の意味と機能」寺村秀夫(1984)に再録  
----- (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房  
----- (1997)『日本語文法研究序説』くろしお出版
- 益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 三上 章(1953)『現代語法序説』くろしお出版から再版(1972)
- Benveniste, É.(1966) *Problème de linguistique générale*. 1, Gallimard (岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』みすず書房)
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., Svartvik, J.(1985) *A comprehensive grammar of the English language*. Longman
- Sapir, E.(1921) *Language*. Harcourt Brace & Company